

主 題：キリストにとどまること

聖書箇所：ヨハネの福音書15章1-11節

テーマ：ぶどうの木であるキリストにとどまり続けるとはどういうことか

「あなたの人生において最も必要なものとは何ですか？」もしだれかがこのように問いかけたなら、皆さんはそれにどう答えられるでしょうか？私がインターネット上で色んなものを探している時に、この世の多くの人たちが自分に今必要なものを探し求めている様子を見て取ることができました。自分の人生にとって最も必要なものは“趣味”と答えていたり、“お金”“家族”“仕事”“地位や名誉”とさまざまな答えがありました。また、人生に必要なものを診断してくれるサイトもあふれるほど存在していました。そのような内容のものは、インターネットの世界だけではなく、本や雑誌にも山のようにあるのです。私たちが周りを見渡せば、この世が、人生において何が最も必要なものなのかを探し求めている様子を見ることができます。問題は、私たち自身がどうかということです。

皆さん、私たちそれぞれの人生にあって、最も必要なもの、最も大切なものとは一体何でしょうか？おそらく、ここにおられる多くの皆さんは迷いなく、「イエス・キリストだ！」とお答えになるかもしれません。それはすばらしいことで、非常に感謝なことです。でも、もしそう答えられるなら、次のことを自分自身に問いかけてみてください。「はたして、私は、『キリストが最も必要なものである』と言う、その信仰にふさわしい歩みをしているのだろうか？」「もし、『私にとって、キリストこそが最も大切なものである』と言うのなら、本当に日々そのことを覚えて歩んでいるのだろうか？」と。

今朝、私たちがともに見ていきたいみことばは、ヨハネ15：1-11です。この箇所自体は、皆さんもよくご存じの有名な箇所の一つかと思います。この時のイエス様と弟子たちの置かれていた状況を思い返してみてください。特にヨハネ13章のところから、イエス様は最後の晩餐の席にあって、十字架にかかる前に、まもなくご自分が弟子たちのもとを離れて父なる神様のもとに帰ることになっているということを彼らに告げておられました。約三年間、どんな時も一緒にいたイエス様が自分たちのもとからいなくなると聞かされた弟子たちは恐れ戸惑いました。それは容易に想像できますね。彼らは、最初からいつもともに歩んでくださった、その愛する主との別れの日がやって来ると聞かされて、これから自分たちはどうしたらいいのだろう…イエス様がいなくなったら自分たちはどう歩んでいけばいいのだろう…と心を騒がせていたのです。また、ここで起きていた出来事は、イエス様が自分たちのもとを離れて天の父なる神様のもとに帰るということと言われていただけでなく、十二弟子のひとりイエス様を裏切るということも彼らに告げておられたのです。これは彼らにとって衝撃的な知らせであったことは間違いありません。この時はまだ、イスカリオテのユダが裏切り者であるということがわからなかった彼らは、この話を聞かされた時に互いに顔を見合わせて当惑していました。愛するイエス様がまもなくいなくなる、そして十二弟子のひとりイエス様を裏切るのだと。この話は、突如として彼らのうちに大きな悲しみや混乱を生み出しました。弟子たちは慰められる必要がありました。弟子たちは励まされる必要がありました。イエス様が地上を去った後で、残された自分たちが愛する主なしで歩み続けていくために助けを必要としていたのです。ですから、イエス様はそのことに関して13章から弟子たちに教えておられました。14章を見ると、「わたしは去って行くけれど、助け手として助けの主なる聖霊なる神様が与えられる」とも言われました。そして、その流れで今から見るこの15章にくだります。

ここでイエス様はご自身のことを「ぶどうの木」だと言われました。また弟子たちのことを、「その木に結びつく枝」だと描写して、大切な教えを与えられていたのです。きょう私たちが特に考えたい大

切な命令がここに記されています。4節でイエス様は弟子たちに対してこの命令を与えたのです。4節の冒頭に「わたしにとどまりなさい」と書かれています。弟子たちに求めた命令、それは「わたしにとどまりなさい」ということでした。もう少し具体的に言えば、この文脈を知っている方はわかりだと思いますが、「わたしがあなたがたの人生にとって最も必要なぶどうの木です。だから、あなたたちはわたしにどんなときもとどまっていなさい。」ということなのです。

ちょっと立ち止まって考えてみましょう。私たちは、「イエス・キリストがぶどうの木である」と聞いたことがあるし、私たちはキリストにとどまり続けるとの「とどまり続ける」ということも聞いたことがあるでしょう。でも、はたして、イエス様がぶどう木であるとは、一体どういうことを意味しているのでしょうか？また、そのぶどうの木であるイエス様にとどまり続けるというのは、一体どういうことを意味しているのでしょうか？そして、今の私たちは実際イエス様のうちにとどまり続けているのでしょうか？きょうは特に、この「キリストにとどまる」ということについて、みことばから学んでいきたいと思えます。それで、いつもなら、1節、2節、3節というふうに順に追っていくのですが、今回はこの中の1—11節の中で、「キリストのうちにとどまる」ということに焦点を置いていくつかの箇所を中心に学んでいきたいと思えます。

これから私たちが見ていくこのテキストの中には、「まことのぶどうの木にとどまる者の三つの特徴」が記されています。とどまることを実践する者がどんな歩みをするのか、その三つの特徴がここには記されているのです。ですからそのことをぜひ、ともに考えてみましょう。このみことばを通して、私たちひとりひとりが、まず何よりもまことのぶどうの木である主イエス・キリストが一体だれなのかを改めて考えて、そしてこの方にとどまり続けるということがいかにすばらしいことなのか、ますますそのように成長したいと願う助け、励ましになることを心から願っています。

では、まずいつも通りみことばをお読みしますので、1節から見てください。イエス様はこのように言われていました。

ヨハネの福音書 15 : 1—11

「1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。:2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。:10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。:11 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。」

●定義：キリストにとどまるとは何か？

さて、これから私たちは、キリストにとどまる者の姿について考えていきます。でもちょっと立ち止まってまず考えてみましょう。そもそも、このキリストにとどまる…この「とどまる」ということばは

一体どういう意味なのでしょう？ 1-11節を読んで気付かれたかと思いますが、この中でイエス様は「とどまる」ということばを何度も何度も繰り返し用いておられました。何回出てきました？ 実際、日本語の聖書の中では、この11節の間にこのことばが11回も登場していたのです。このように何度もこの「とどまる」ということばを口にするので、それが弟子たちにとって何よりも重要なものであると強調しておられたのです。また特に4節では、イエス様は「わたしにとどまりなさい」との命令を弟子たちに与えておられました。彼らの歩みにとって、このキリストのうちにとどまるということは、主から与えられた命令だったということです。責任だったということです。彼らの歩みにとって必要不可欠なものでありました。では、そもそもこの「とどまる」とは、一体何を意味するのでしょうか？

この「とどまる」ということばには、もともと「あるものが、その場にずっと残り続けていること、とどまり続けること」そういった意味で用いられます。ときに「滞在する」という意味で用いられることもあります。「そこにとどまっていること、残り続けていること」を言うのです。またこのことばは「あるものが何かに密接に結びついていること」そんな様子も表します。ですから、「何かはその場にずっととどまっていること、何かは何かに密接に結びついていること」それがこの「とどまる」ということばの持っている意味です。つまりイエス様がここで「わたしにとどまりなさい」と言われたときに、これは弟子たちがイエス様から「イエス・キリストから決して離れることがないように。どんなことがあろうとも、どんなときであろうともわたしに密接に結びついていなさい。」と求められていたということです。もっと言えば、この文脈を考えてみたときに、イエス様はこのヨハネ15章で、ご自身と弟子たちの関係を、「ぶどうの木」と「枝」に例えて説明しておられました。枝が枯れずに成長し続けるためには、何が必要だと思えます？ 枝が変わらずにぶどうの実を实らせるために、何が欠かせないと思えます？ もちろん明白ですね。枝は、木に結びついていないといけないということです。そこに太陽があらうと、水があらうと、もし木に枝がくっついていなかったら、その枝は生きていくことができないのです。木から栄養分を摂り続けることなしには枝は死んでしまいます。それが、どんな枝であらうとも、大きいものであらうが小さいものであらうが、枝が枝自体では決して成長することも実を結ぶこともできません。枝が生きていくためには、枝が木に結びついているということ、そこにすべてがかかっているのです。ですから、枝が1ミリでも木から離れてしまえば、一見するとくっついているように見えるかもしれませんが、その枝は、もうそれ以上生きていくことはできないのです。これと、この「ぶどうの木」と「枝」の関係が、イエス様と弟子たちの関係とも同じだということです。枝がぶどうの木から離れては決して生きていくことができないように、弟子たちはいつもキリストと密接についていなければ、何があらうともどんなことがあらうともこの方から決して離れることなくこの方に固くくっついていなければならないということです。ですから、枝であるキリストの弟子たちにとって、何よりも重要だったことは、いのちの源であるキリストにとどまり続けることでした。それが欠かすことのできない超重要なことだったのです。

さて、今キリストにとどまるということが何を意味するのかを簡潔に見ました。私たちは、弟子たちにとってはどんなときもイエス・キリストから離れることなく密接に結びついていることが重要なのだとわかったと思えます。でも多くの方は思ったでしょう。キリストにとどまり続けることの大切さはわかりましたが、具体的にそれは何を意味するのですか？ いつまでも決して離れないでいるというのは実際にどんなふうに進むことを意味しているのですか？ キリストにとどまり続ける者とは一体どんな人物のことをいうのですか？ と。もちろんほかにも色んなものを挙げることはできますが、今回私たちはこの中に少なくとも三つの特徴を見て取ることができます。キリストにとどまり続ける者の特徴です。

○キリストにとどまる者の姿：三つの特徴

1. キリストがいのちの源であると信じること 1節

まず一つ目の特徴は、「キリストがいのちの源であると信じること」です。言い換えれば、キリストにとどまる者とは、まず何よりも、自分自身が枝であって、キリストだけが生きていくのに必要なものを与えることができる唯一のお方だと受け入れることが欠かせない、ということです。それがなければすべてが始まりません。単に枝が木に結びついていなければ生きていけないということを知っているだけではなく、キリストに結びついていかなければならないのだと、それでなければ自分は生きていくことはできないのだと、そのように自分のこととして信じ続けているかどうかだということです。

ここで皆さんに改めて注目してほしいことは、特に1節で、イエス様がご自身のことを「わたしはぶどうの木であ」と、そう表現されていたことです。多くの方はご存じだと思いますが、私たちがこのヨハネの福音書を見ていくときに、イエス様はこれと同じように「わたしは〇〇である」との表現を実に7回にわたって使われていました。たとえば、ヨハネ6：35には「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」と書いています。また8：12には「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」とありました。またヨハネ11：25では、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」とあります。そして14：6には「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と。このようにイエス様はご自身が「わたしは何々である」という表現を14章までで6回使われました。そして最後この15章で七つ目となる「わたしはまことのぶどうの木であ」と述べられていたのです。イエス様が「わたしは何々である」と何度も何度も宣言することで、ご自身が神の御子であること、そして、ご自身のうちにのみ人々が必要とするいのちがあることを表わされてきました。このように宣言することで、イエス様は、ご自身こそが人々に欠かすことのできない唯一のいのちを与えることのできる存在である、と明らかにされていたのです。1節に「わたしはまことのぶどうの木であり」と書かれていましたね。ここでイエス様は「わたしはぶどうの木であり」とはおっしゃいませんでした。「わたしはまことのぶどうの木であり」と。つまり、イエス様は単なるぶどうの木ではなかったということです。この方こそが、まことのぶどうの木でした。ここで使われている「まことの」ということばには、「偽物でない」「本物の」という意味が含まれています。つまりイエス様のうちにのみ本物のいのちがあって、それ以外のものはすべて偽りだということです。この方だけがすべての必要を満たすことのできるただひとりの存在だ、ということです。この方のうちにのみ、いのちがあるのだと。

そこで、ちょっと救われる以前の自分自身の姿を思い出してみてください。みことばははっきりと教えてくれていました。「私たちはみな、例外なく自分の罪と罪過の中に死んでいたものであった。」と。エペソ2：1-3にはっきりと書いてあります。「：1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。：3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」本来であれば、私たちはみな、創造主なる神様によってその栄光を現す者として造られました。しかしそんな私たちは、生まれながらに神様に従うことよりも、自分の心の望むままを生きてきました。だれひとりとして神様など求めようともせず、好きなように生きていくことに何の問題もないと考えてきたのです。聖い神様の前にかたくなに逆らつて、忌み嫌われるそんな罪を繰り返し繰り返し犯し続けてきました。逆らい続けてきたのです。だからこそ、そんな罪人である私たちはみな、ここにいる全員がその罪ゆえに、ただ神様の御怒りを受けさばかれて当然の存在でした。罪ゆえに永遠に滅んでしかるべき存在でした。そんな私たちは罪の中に死んでいたのです。私たちには何もできませんでした。私たちは死んでいたからこそ、自分の力で自分のことを救うなどということは到底できな

かったのです。だからこそ、私たちにはこの罪の問題を解決することは何一つできませんでした。しかしそんな私たちに対して、神様がその大きな愛のゆえに救いを与えてくださったのです。罪の中に死んでいた私たちに対して、神様がいのちを与えてくださいました。先の続きのエペソ2：4-5節に「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」「罪過の中に死んでいたこの私たちを…」と書かれていました。私たちはみな死んでいました。しかし、このキリストとともに神様が私たちを生かしてくださったのです。だれひとりとしてこのような主の慰め、あわれみを受ける資格のある者などいませんでした。でもそんな私たちのために神の御子であるイエス・キリストは、人として地上に来てくださり、私たちの罪を負って十字架にかかってくくださったのです。この方が身代わりとして死んでくださったからこそ、三日目によみがえってくださったからこそ、この偉大な救いのみわざを通して、神様はご自分のもとに悔い改めと信仰を持って来る者に対して、罪の赦しを与えてくださったのです。こうして、いのちの源であるキリストを信じた者にはこの方にあっけいのちが与えられました。キリストと一つのものとなされました。

だからこそ皆さん、私たちは新しいいのちを与えられてそれですべてが終わりではありません。キリストを信じ新しいいのちを与えられた者は、その後も変わらずにキリストへの信仰によって生き続けていこうとするのです。このようにガラテヤ2：20も記しています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」信仰によって救われ、信仰によって新しいいのちを与えられた私たちは、信仰によって新しい人生を歩み続けていくのです。ここで大切なのは、恵みによって、そのキリストの信仰によって救われた者たちは、救われた後は自分の力でやっつけいこう、とはならないということです。ぶどうの木に結びついた枝は、結びついたら後は自分の力で生きていきましょう、とはならないということです。枝はどんなときも、すべてのことにおいていのちの源である木に結びついていなければいけません。木に結びついて木により頼むことなしには成長することはできないのです。枝が成長して実を結ぶために欠かすことのできない栄養分を木から得続けなければいけないわけです。

だからこそ、キリストにとどまる者というのは、まず何よりも自分自身が枝であると認める者です。キリストだけが生きていくのに必要なものを与える唯一の存在だと受け入れる者です。自分が木に結びついていなければ生きていくことはできないと認める者のことです。いのちの源であるそのぶどうの木に結びつくことが自分にとってすべてなのだとして受け入れ、その信仰によって歩み続けていこうとするのです。

だとすれば、はたして私たちはどのように今イエス・キリストを見ているのでしょうか？この方はあなたにとって欠かすことのできないいのちの源である、と信じておられるのでしょうか？キリストこそがまことのぶどうの木である、と信じておられるのでしょうか？この方なしには自分は生きていくことはできない、と信じているのでしょうか？この方だけが自分のいのちだとそう信じているからこそ、この方に固く結びついていくことを何よりも求めているのでしょうか？それとも、ほかの何かに信頼を置いていこうとするのでしょうか？ほかの何かから自分に必要な栄養分、自分に必要ないのちを得ることができると勘違いして歩んではいけないのでしょうか？

キリストにとどまる者、それは自分自身が枝であると認め、キリストだけが生きていくのに必要なものを与えるいのちの源だと、そう信じ受け入れる者でした。

2. キリストのことばを信じること 7節

続けて二つ目にキリストにとどまる者の特徴として挙げられるもの、それは「キリストのことばを信じること」です。7節にはこのように記されてきました。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのこと

ばがあなたがたとどまるなら、何でもあなたがたの欲しいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら」救われた者たちはキリストのうちにとどまり、それだけではなくて、同時にキリストのことばのうちにもとどまろうとするのです。「キリストのことばにとどまる」とは、一体どういうことだと思いますか？今私たちは、キリストにとどまるということは、この方がいのちの源であると認めて、このキリストに信頼して、このキリストから離れようとせずにならぬと結びつきながら歩いていくことだと見ました。キリストのことばにとどまる、というのも同じように、みことばこそが自分にとって欠かせないものだとして受け入れて、どんなときもこれに信頼して歩み、ここから離れようとせずにならぬとそれに結びつきながら歩いていこうとする者だということです。自分たちの成長にとって、ぶどうの木であるキリストが欠かせないと信じているのと同じように、自分たちの成長にとって、みことばこそが欠かせないものだとして信じているということです。キリストのことばが真理のものであるからこそ、それを疑うのではなくて、どんなときも従おうとします。もっと言えば、キリストのことばにとどまるというのは、私たちの歩みにおいて、そのことばの教えこそが権威あるものだと認める、ということです。皆さん、キリストのことばにとどまるというのは、キリストのことばこそ権威あるものと認めて、心から信じていくこと。権威あるものと認めるなら、そのことばにのみを耳を傾けようとするのです。そのことばにとどまろうとする者は、この世の意見や自分の考えなどに耳を傾けるのではなくて、ただ、みことばこそが自分の成長に必要なものであるからこそ、それに従おうとするのです。良いときも悪いときも、たとえ自分にとって理解できないようなそんな状況に置かれることがあろうとも、神様のことばは真理でありその約束は変わらないのだと、信じ続けようとするのです。

これは、まさにかつての信仰の勇者たちが歩んだ姿でもありました。色々な人物を挙げるができます。たとえば、アブラハムはどうだったでしょう？アブラハムは神様から、自分の息子であるイサクを全焼のいけにえとしてささげるようにと、そんな命令を受けたことがありました。どう思いますか？間違いなくその命令を神様から受けたとき、彼は驚きや混乱、様々な感情を抱いたことでしょう。この当時、全焼のいけにえをささげるというのは、単にそのものに火をつけて燃やすだけではなくて、そのささげるものからだをバラバラにするという過程を伴うものでもありました。アブラハムはそのことをよく知っていました。自分の手で愛する息子をバラバラにして殺さなければいけないということを考えたときに、ひどい悲しみを覚えたことは言うまでもないでしょう。でもそれだけではありませんでした。皆さん覚えているかと思いますが、彼はそんな悲しみ以上に大きな混乱というものを覚えたでしょう。なぜか？それは、アブラハムはほかのだれでもない神様から、「あなたの息子「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」」（創世記21:12）との約束を受けていたのです。神様は「イサクを通してアブラハムの子孫を増し加えられる」との約束を与えていました。だからこそ、全焼のいけにえとしてイサクをささげるということは、だれの目から見ても考えられないことだったのです。でも、神様から命令を聞いたアブラハムはその命令に素直に従ったのです。彼は自分自身の感情や考えに従うのではなくて、自ら進んで、自分の子を神様にささげようと思いました。ヘブルの著者は、このようなアブラハムの信仰に関して、次のことばを残しています。ヘブル11:17-19に「:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで、彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」アブラハムは神様のことばを信じていました。その約束を疑うことはありませんでした。神様が「イサクから出るものがあなたの子孫と呼ばれる」と約束されたのであれば、たとえ自分が今いけにえとしてイサクをささげようとも、神様は、必ずイサクをよみがえらせてもその約束を果たされると信頼したのです。だからこそ、彼はたとえ自分の頭では理解できないこ

とであろうとも、揺るがない神様のことばに希望を見出しました。神様のことばは、言われたことを必ず成し遂げるのだと、それが彼の持っていた確信だったのです。

そして、これこそが神様のみことばを信じる者の歩みでもあります。だとすれば、私たちはどうでしょうか？はたして、私たちは、この神様のことばをどんなときも信頼して変わらずにそれにより頼んで歩んでいるでしょうか？皆さんはそれぞれにこれまでにみことばを学んできて、頼りにしている約束があるだろうし、頼りにしている希望を見出すそのような箇所もあるかもしれません。けれど、その神様のことばに対する信頼は、周りの状況や自分の感情や思いによってすぐに揺れ動いてしまうようなものではないでしょうか？自分の手に負えないような、自分の頭では理解できないような場面に陥ったなら、はたして、私たちは何に信頼を置いているのでしょうか？何に希望を見出そうとしているのでしょうか？変わらない神様の約束でしょうか？それとも自分の知恵や力でしょうか？皆さん、私たちはいつも希望を持つことができます。神様が成されると言われたことは成されるのです。神様が約束されたことは、必ず神様が成し遂げられるのです。だから信仰の勇者たちはそれを信じて歩みました。私たちもそれを信じて歩むことができます。神様が言われればその通りになると。キリストのことばにとどまり続けること、それはこのキリストのことばこそが、自分にとって欠かせないものであると信じて受け入れて、そしてこれを決して離すことなくそれに立ち続けて、それを離さずに歩み続ける者でした。

3. キリストの愛を信じること 9-10節

そして最後三つ目にキリストにとどまるものの特徴として挙げられるもの、それは「キリストの愛を信じること」です。そのことが今度は9節に記されていました。15：9「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」さて、ここでイエス様は「わたしの愛の中にとどまりなさい」と弟子たちに命令していたのです。では、立ち止まってよく考えてみてください。イエス様がここで「わたしの愛の中に」と言われたときに、これは一体どんな愛を表していたのでしょうか？その前にイエス様はこう口にされていましたね。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。」皆さん、聞きましたか？言い換えれば、弟子たちを愛されたイエス様の愛は、父なる神様がイエス様を愛されたその愛と全く同じものだということです。イエス様はご自身が父なる神様から受けた愛と同じかたちで弟子たちを愛されたということです。これは凄いことだと思いませんか？なぜなら、考えてみてください。父なる神様はどのようにしてイエス様のことを愛されたのでしょうか？もちろん、色んなことを挙げることはできますが、少なくとも言えるこの愛は、永遠に変わることはない愛でした。この愛というのは、すべての初めから存在し、これから先も決して途絶えることのないそのようなものでした。ヨハネ17：24でイエス様はこんなことばを口にしておられました。「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしと一しょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」「あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたために…」ひとり子に対する父なる神様の愛は世の始まる前から変わるものではありませんでした。この愛には終わりもなければ、この愛の大きさは変化することはありません。永遠に変わることのない愛…それが父なる神様が御子に示された愛だったのです。そして、イエス様はこの愛を受けて言われたのです。「わたしもあなたがたを愛しました。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたをその愛で愛しました。」と。これを覚えるなら、今の私たちにとっても大きな喜びをもたらしてくれるものになるのです。神の子どもに対し示されるキリストの愛というのは、昔も今もそしてこの先もいつまでも変わることのないものなのだ、とみことばは教えてくれているのです。だれであろうと、どんなものでであろうと、このキリストの愛を変えることのできるものは一つとして存在しません。思い返してみればパウロはこのように言っていました。ローマ8：38-39に「:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリ

スト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。キリストの愛は変わらない愛でした。そして、「こんな愛のうちに、とどまりなさい」とイエス様は命じておられたのです。言い換えれば、イエス様ははっきりこのように求めておられたのです。「この愛を、どんなときも信じ続けていなさい」と。今までと同じでした。何があろうとも疑うことなく変わらずにそれに信頼して歩み続けていきなさい。いつまでもこの愛は変わらない、そんなキリストの愛を心に覚えていなさい。」と。

確かに、私たち自身は、その愛を信じることに難しさを覚えてしまうこともあるでしょう。ある人は色々な試練によって酷く苦しんだり、その痛みの中でキリストの愛というものを見出せないでいるかもしれません。ある人は罪との葛藤を経て喜びや希望を失っているかもしれないし、罪との戦いに繰り返し繰り返し敗北する中で、「こんな私なんて神様はもう愛してくれないかもしれない、愛してくれるはずなんてない。」そんな不安や悲しみに支配されることもあるかもしれません。「自分のような者を神様は愛してくださらない。」そんな恐れや疑いが私たちのうちに生まれれば、神様との間に距離を感じるようになるのです。そしてその距離をどうにか埋めようとして、自分の努力で神様の愛というものを手に入れようとするかもしれません。でも皆さん、私たちが覚えることができること、みことばが私たちに教えてくれていることは、救われた子どもたちに対するこのキリストの愛は決して変わることはない、ということです。もし変わるタイミングがあるとしたら、父なる神様から子なる神様イエス・キリストに対する愛が変わるときです。そんなことは、これから先も絶対に起こらないのです。だからこそ、キリストがあなたがたを愛したというその愛は変わることはないのだと信頼することができるのです。そしてもし、私たちがそれでもなお神様の変わらない愛を見出すことに難しさを覚えることがあるなら、そのときはあの十字架の上で示された神様の愛を思い出すことです。ローマ5：8は言っていました。「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことのより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と。

改めて考えてみてください。イエス様は十字架の上で私たちの想像を絶するほどの苦しみを味わわれました。この方は、地上での生涯において一切の罪を犯すこともなければ、すべてのことにおいて完全な正しさを示された、そのような義なるお方だったのです。しかしそのように罪も一切ない主イエス・キリストが、何度も何度もむちを打たれ十字架の上で苦しまれました。そのからだは激しく痛みで弱り切っていただけではなく、十字架を取り囲む者たちから「もし神の御子なら自分自身のことを救ってみろ」とののしられ辱めを受けました。そしてそれらに加えて、何よりも、彼は父なる神様から一時的に引き離され、私たちが受けるべき罪をすべて負って神様の御怒りに耐え忍ばれたのです。神のひとり子が私たちの罪のために刺し通されて、だれも経験したことのない痛みと苦しみを味わわれました。本来であれば、ここにいる私たちひとりひとりに注がれるべきその神様の怒りを、その神様の罪の罰を、イエス・キリストは十字架の上で代わりに受けてくださったのです。この方がなだめの供え物としてその血を流してくださったからこそ、私たちには今、その罪の赦しが与えられました。一体どうしてこんなことをなされたのか？それはただ神様のあわれみでした。神様の愛だったのです。だからこそ皆さん、私たちはこの愛を忘れることなく、この愛をどんなときも信じ続けることです。主の愛はもう十字架の上で明らかにされました。この愛にとどまり続けることです。

ここで、愛にとどまることについて、信じるということをお教えたのですが、こんなことばを10節で付け加えていました。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」

「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです」とイエス様は言われました。一体ここでイエス様は何を言わんとしたのでしょうか？「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまる…」ということは、私は戒めを守らなければ、キリストの愛を失ってしまうことになるのだろうか…従えば愛を手にして、従わなければ愛を手にする事ができな

いのか…そう思われた方があるかもしれません。でも、イエス様はこの箇所でそのようなことを教えようとしていたわけではありません。今までずっと見てきたように、キリストの愛というものはいつまでも永遠に変わることはない愛でした。ですから、戒めを守らなければ愛がなくなってしまうということをお教えしようとしたのではなかったのです。では何を言わんとしたのか？ここでイエス様が言わんとしたこと、それは、私たちが戒めを守るのであれば、私たちはキリストの愛を味わい楽しむことができるし、その逆に戒めを守らなければ、神様の愛や交わりというものを楽しむことができなくなる、ということです。言い換えると、先ほどから見るように、愛は変わることなく存在しているのです。でもその愛を楽しむことができるかどうか、この神様との交わりを楽しむことができるかどうかは、戒めを守ることによって左右されるというわけです。キリストの愛が途絶えることは決してありません。みことばに従って歩んで、罪があればそれを告白して悔い改め、それでまた歩むのであれば、その者は神様との交わりを楽しむことができ、いつまでもこの方の愛を喜ぶことができるのです。しかし、もし、私たちが神様に逆らって戒めを守らずに、ことさらに罪を犯し続けるのであれば、神様との交わりを楽しむことも、この方のうちにこの方の愛を見出すことにも、難しさを覚えるようになるというわけです。だからこそ皆さん、愛にとどまるために、神様との交わりを保つために、私たちは主の戒めに進んで従おうとするのです。その愛を手にするためではなく、その方との喜びに満ちた交わりを守るために、私たちは主の戒めに従おうとするのです。この方を愛するからこそ、その戒めに従おうとするのです。そして、そのようにして神様の命令を守る者のうちには、神様もまたいてくださるのだということ、それがみことばでも教えられていました。Ⅰヨハネ3：24「神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。」と書いていました。キリストの愛にとどまるということは、キリストの愛を信じ続けることでした。そしてこの方を愛するからこそ、戒めを守っていきましょうとするのです。

〇まとめ

さて、ここまで私たちはキリストにとどまるということに関して、いくつかのみことばに焦点を当てて学んできました。最後に改めて注目してほしいこと、それは、キリストにとどまる者は必ず実を結んで神様の栄光を現す一方で、実を結ばない者には厳しい警告が与えられているということです。イエス様はこんなことばを15：2、6で与えていました。2節「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、…」また、6節を見ると「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて、火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」神様からの警告は明白なものでした。それは、もし枝が実を結ばないのであれば、その枝は取り除かれる、ということです。その枝は火に投げ込まれる、ということです。言い換えれば、実を結ばないような者は必ず神様からの厳しいさばきを受けることになる、ということです。

皆さん、これはとても大切なことなので、よく聞いてください。聖書が私たちに教えてくれていること、それは、この世には実を結ばないクリスチャンはひとりとして存在しないということです。これまで私たちが見てきたように、もし私たちが本当にキリストにとどまり続けているのであれば、いのちの源である木に結びついているのであれば、必ず時が来れば実を実らせませす。それは私たち枝がどうかして味を実らせようとするわけではなくて、木からその栄養源が与えられているからこそ、枝は勝手に実を結ぶようになるのです。たとえばですが、ちょっと季節外れかもしれませんが、皆さんが春に桜の木を見に行ったらとしましょう。桜の木に枝がくっついているのに、もしそこに全く花を咲かせていなかったらどう思います？どう考えても何かおかしいと思いませんか？私たちは枝が木にしっかりと結びついているのであれば、必ず実を結ぶはずだとわかっているのです。これは私たちの場合も同じです。私たちがイエス・キリストにとどまっているのであれば、そのイエス・キリストにふさわしい御霊の実というものを結ばなければ何かがおかしいということです。

皆さん、これは表面上を取り繕っても仕方ありません。どれだけ教会に通っているとか、どんな働きをしているとかそういったことが問題でもありません。もちろん教会に通うこと、礼拝すること、仕えることは大切なことです。でも、その人の生き方がキリストのうちに見られるような御霊の実を結んでいるかどうか問題なのだと、イエス様は警告しておられたのです。

考えてみれば、あのイスカリオテのユダがまさにそうでした。ユダは十二弟子のひとりとして、三年の間イエス様につき従っていたのです。しかし最後はどうなりました？彼はイエス様を裏切ってイエス様のもとから去りました。確かに彼は色々な働きに加わっていました。伝道の働きをすることもあれば、みことばを教えることもありました。また、彼は十二弟子の中でお金の管理を任されていたのです。それだけ十二弟子の中でも信頼されていた人物でした。また彼はイエス様のみことばを間近で聞き続けていたのです。イエス様のなされる奇跡も間近で見続けていたのです。しかし本当の意味で救われていなかったからこそ、彼はイエス様のもとにとどまることをしませんでした。そこから離れて行ったのです。

何をすることが大切なのではなくて、その心が変わっているかが大切だということです。その心がキリストによって変えられているのかどうか…だとすれば、どうでしょう。はたして、私たちはどんな実をきょう実らせているのでしょうか？私たちの隣人は私たちのうちにキリストを見るのでしょうか？それとも神様を知らないこの世の人と何ら変わらない、そんな姿を見るのでしょうか？もちろん、御霊の実をどれだけ実らせているのかは、ひとりひとり違います。でも皆さん、確実に言えることは、いのちの源であるキリストにとどまり続ける者、そんな真のクリスチャンは必ず実を実らせる、ということです。カギとなるのは、人生において最も必要である、そのまことのぶどうの木であるイエス・キリストにとどまり続けているのかどうかです。

ですから最後にもう一度、最初の質問を自分自身に問いかけてみてください。あなたの人生において最も必要なものは何でしょうか？この世の人々は今もなお、自分にとって大切なものを探し回っていました。自分を何かしら満足させて、何かしら自分に喜びをもたらしてくれるものをどうにかして追い求めていたのです。しかし私たちがこのイエス・キリスト以外に何かを求めても、そんなところに喜びはありませんでした。私たちにとって最も大切なもの、それは、私たちの罪のために死んでくださったイエス・キリスト、まことのぶどうの木だけだ、ということです。この方のうちにとどまることこそ、私たちにとって本当の喜びを見出すことができるということなのです。イエス様は、こんなことを11節で述べられています。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」キリストにとどまり続ける者は、キリストの喜びがそのうちにある、それを楽しむことができると。だからこそ、きょう改めて考えたように、キリストを自分のいのちの源であると信じて、キリストのことばを信じて、そしてキリストの愛を信じながら歩み続けていくことです。このまことのぶどうの木にとどまり続ける者、この主を愛する忠実な者として、ともに成長していきましょう。